

日本とちょっと違うよ - 通訳者よもやま話 - Vol.10 スペイン語担当 津田さん

来日したばかりの私には、日本は母国アルゼンチンとあまりにも違って、全てが新鮮で驚きの毎日でした。

例えばアルゼンチンでは、同じ年ごろや少し年上の人と話す時に敬語を使うと、相手に「私はそんなに年上に見えるのか?!」と不愉快な気持ちにさせることがあります。しかし、同じラテン系のメキシコでは日本と少し似た感覚です。敬語を使う場面では、私は今でも通訳する時に少し違和感があるため、年齢に関係なく丁寧に話すようにしています。

次に違うな〜と感じたことは、赤ちゃんです。日本の赤ちゃんの性別は分かりにくいです。アルゼンチンでは、生まれて2日目に専門のスタッフが小さなバリカンで赤ちゃんを坊主頭にし、女の子であれば、別のスタッフがピアスをつけに来ます。女の子のお祝いとして金のピアスをもらうのが一般的です。ピアスをしない赤ちゃんでも、女の子は洋服の色が可愛くてはっきりしています。見た目だけでなく名前を聞いてもすぐに分かりますが、日本の赤ちゃんの名前は、時々女の子か男の子か判別しづらいです。

最後に紹介したい違いは、「日本人は風邪で病院に行く!」ことです。これは本当に驚きました。日本ではそれくらい受診しやすいということですね。アルゼンチンでは民間の医療保険に加入していればまだ良いですが、公共の病院で受診したければ朝の4時から並ばないとはいけません。その不便さのため、手遅れになるケースが多いそうです。その代わりに、アルゼンチンの公共病院では、手術も含めて、無料で誰でも素晴らしい医療が受けられます。すごいですよね。



〜「インクルーシブ防災」〜



Medi-Wayがある関西では、毎年1月17日の阪神・淡路大震災に関連したさまざまな催しが、神戸を中心に行われます。今年、そんな中で耳にしたのが「インクルーシブ防災」という言葉。国連防災世界会議の提唱から、「誰も取り残さない防災」つまり高齢者や障害者、(日本語の分からない)外国人などを含む全ての人を災害から守ろうという考え方です。

3月には東日本大震災の記憶もあり、また近年の豪雨や豪雪被害などを見ても、防災は私たちのとても身近な課題だと言えます。災害の際の大切な「自助」とともに「共助」の場面で、通訳者として何かで役割が果たせたらと思いました。



今月のトピックス

「訳しにくい日本語」

前回、「お風呂」という単語に、生活習慣が違う国の人の場合には訳出に注意するとお伝えしました。同じように「ごはん」もあります。「今朝、ごはんを食べましたか?」という医師の質問に「朝食を食べたのか?」はたまた「朝食に米を食べたのか?」、通訳者はお話の流れから外れないよう気をつけながら、時には確認して訳します。

医療現場でたまに出会う「あれ?なんて訳そう…」と頭を悩ませる日本語。「きついから」「気を付けて」「大丈夫」「悪さする」「やっかいな病気」「よろしく」等々。日本語はそもそもあいまいな表現を使うことが多く、相手の立場や気持ちに配慮して、はっきり言わずに、でも文脈から理解できるようにニュアンスで伝える、そんなケースが多いように思います。

受診する患者さんの中には日本語が多少理解できる方も多く、医療者の言葉に必死で耳を傾けておられます。例えば、
*「トイレは近いですか?」(いや廊下の奥、そんなには…)
*「胸はきれいですね」(女性だとドキッ!?)
*「皮膚がまける」(勝つ?負ける?)
*「(小児科の先生が)もしもしますよ」(えっ、電話?)

他には日本語特有のオノマトペ。「イガイガ」「ゼロゼロ」「ジンジン」「ビリビリ」「ビリビリ」…通訳者はいろいろな事例を共有しあって、ボキャブラリーを増やせるよう努めています。

